学園の道化師

葵彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学園の道化師

【Ｎコード】
Ｎ０５５２ＢＡ

【作者名】
葵彩

【あらすじ】
あるきっかけで顔をド派手に、まるでピエロのようにした美汐。これは今では自分のもう一つの顔だし、変えないつもりだった…けど、一人の少年に出会って――――――――。

1.　これが私（前書き）

初投稿です。
誤字＆ａｍｐ；脱字があるかもしれませんが、温かい目で見守ってください。
思いついたままに書いてるので話がずれちゃったらすみません。

1.　これが私

私道化美汐（どうけみしお）　１６歳、高１。
高校生活はまだ３ヶ月、でも学校内ではちょっとした有名人になりつつある。
別に特別美人でも可愛いわけでもないし、お金持ちのお嬢様ってわけでもない。
でも、すれ違う人は必ずと言っていいほど振り返り私を再確認しひそひそ話したり驚いた顔をする。
正確には私の「顔」を見て驚いているんだけど。…失礼しちゃうわ！

まぁ、それも仕方がないのだけど。なぜなら私の右頬には涙マーク、左頬には星マークのシール。
目はぱっちり二重にラインストーンがあしらわれた派手目の大きなつけま。
髪は金に近い明るい茶色。そう、まさに「道化師（ピエロ）」だ。

とあるきっかけでこんな顔をしているけど、毎日生活指導の山田に注意される以外は特に苦なく楽しく高校生活を楽しんでいる。
周りは最初は引き気味だったりで、近づいてこなかったけど３ヶ月という時間と、私の中身があまりきつくなくけばすぎないことから今は学園生活に困らない程度に友達も出来たし、逆に目立って派手目のお姉さまやお兄さま方に声をかけられるようになった。

これは私の顔であるし、今更変えるつもりもない。
先生に怒られても周りが笑ってくれるから別に気にしない。
むしろ、前の普通の私に戻るのが怖い…と思ってたんだ――――。

――――そう、彼に出会うまでは…。

2．お昼はのんびり中庭で（前書き）

主人公のキャラが不安定…（；。。）

2．お昼はのんびり中庭で

「美汐っ？」

おはよっと後ろから声をかけられた。声の主は私の心許せる友達の喜瀬依里子（きせよりこ）だ。

私はヨリちゃんと呼ばせてもらっちゃっている。

「しっかし、相変わらず派手な顔ね。遠くからでも美汐だって分かっちゃうわ。」

笑いを含めてヨリちゃんは私にそう言った。私は目立つ存在だと。でもそんなヨリちゃんだって目立つ存在だ。理由は私とは違うけど。

彼女は成績優秀で顔も性格も育ちまで良い、まさに乙女の理想の女の子。そんな彼女がどうして私みたいなのと絡んでくれるのか謎だ。楽しいから気にしないけどね。

「あぁ、そういえばさっき山田が美汐のこと探してたよ。」

くすっと笑ってヨリちゃんがそう言った。もちろん私は顔を歪めてしまう。

「えー、またお説教かな…。もう毎日ほんと懲りないわね、あの先生。」

全く、そろそろ諦めてくれないかな山田。私はこの顔を変えるつもりなんてないんだしさ。

何気なく窓の外を見ると温かな光に照らされた中庭が見える。あったかそうだな…。

「そうだ、ヨリちゃん。今日は天気も良い事だし、中庭でお昼を食べない？」

今は6月で梅雨の時期。こんなに気持ちのいい晴れの日はめった

にない。是非、お外に出て空気に触れたいものだ。
「いいけど、顔大丈夫なの？」
「顔？」
「そのピエロメイク。結構気温も上がってきてるよ？　汗とか大丈夫なの？」
あぁ、そういうことか。ヨリちゃんは私の顔が崩れて悲惨な事にならないかを心配してくれたんだな。
「大丈夫。そんなに汗っかきじゃないし、水に強いの選んでるから？」
でも夏場は考えないと…。友人の前で道化師ではなく化物メイクを見せる事になるかもしれない。なんだか、そんな自分を想像するだけでぞっとするわ。
身震いする自分に、ふと、突き刺さるものを感じたので振り返ってみると、いつも通り朝の通学ラッシュで生徒がいたるところに居た。
特別誰かが此方を見ているようでもなさそうだけど、いかんせん目立つ顔なのでちらちら此方を見て驚く視線は感じる。けれど、先ほどのような突き刺さる感じは今はしない。
はて、今のはなんだったのやら…――――――――――――――。

午前の授業も終わり、私とヨリちゃんは中庭に向かう。今日の私のお昼は、母が寝坊したので近所のコンビニで買った菓子パン２つ。自分でお弁当を作る事はあるのだが、朝は食より顔に時間をかけるのでどうしても中身が自然解凍できるものや冷凍食品に頼りがちになってしまう。そんなお弁当何度も食べていれば嫌気がさしてしまう。だから、母に余裕があるときはお弁当は任せちゃっている。
ヨリちゃんのは、四角いランチボックスに洋食風の内容の明るい「ｔｈｅ女の子☆」というお弁当だ。美味しそう…。

中庭の顔の辺りはちゃんと日陰だけど、日の光も浴びれるという素晴らしい条件のベンチに腰掛けいざランチタイム。
「そういえば、なんでそんな顔にしたんだっけ…？」
「えー。今更だね。そうだなー…。」
こんな顔にした理由はもちろんある、けどそれをヨリちゃんに伝えていいのか悩む。自分の暗い事ってあんまり仲良い友達でも話しにくいじゃん。
「なんとなく…かな。ま、一種の高校デビューだよ。」
ちょっとおどける感じで言ってみた。ヨリちゃんは少し顔をしかめたけど、私の気持ちをくみ取ってくれたのかそれ以上は訊いてこなかった。

「それより、美汐知ってる？」
「何が？また山田が私を探してた…とかは嫌だからね。」
おちゃらける私にヨリちゃんは違う違う、って微笑しながら言った。
「今期の風紀委員のこと。」
「風紀委員？！…ってあの、生徒の遅刻調べたりとかするやつ？それがどうかしたの？」
風紀委員…今の私が最も関わりたくない部署だな…ははは。違反しまくりだもんな…私。
ヨリちゃんの話によると、今の風紀委員はかなり校則に忠実らしい。風紀委員なんだから普通だし、噂だけど前もそんな感じだった気がするって言ったら、前よりもっと厳しくなったらしい。前は軽い着崩しや、髪型や髪の色（派手すぎない色）なら個性を出しても良かった。でも、今の風紀委員はそれすら厳しく規制しているらしいのだ。全く迷惑な話だ…！正確に言うと風紀委員全体が厳しくなったのではなく、ある男子生徒一人が独走しているらしい。
「それって周りは反発しないの？私なら一人独走とか許せん！」
「それがその男子生徒が割と人気があるのよね。やることが全て

完璧だから、反発している人も文句が言えないのよ。」
「あらあら…。」
いずれ私にも火の子が飛んでくるのかしら…。あー、やだやだ。
なんかそんな感じで私たちのお昼は終わった――――――――。

2．お昼はのんびり中庭で（後書き）

あれ、恋愛になかなか持っていけそうにないです。
今まで「w」で笑いを表してたんでどう表現していいのか分からないです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0552ba/

学園の道化師

2012年1月10日14時51分発行